

平和で豊かな沖縄県を目指す情報誌

無料

ご自由にお持ち
帰り下さい

2017.3

No.5

沖縄協会だより

第38回（平成28年度）沖縄研究奨励賞贈呈式



左から照屋俊明氏、3番目に西岡敏氏、5番目に野添文彬氏

第38回 沖縄研究奨励賞贈呈式

沖縄協会は、平成29年1月26日「第38回沖縄研究奨励賞贈呈式」を那覇市内のホテルで開催した。今回受賞した自然科学部門の照屋俊明琉球大学教育学部准教授、人文科学部門の西岡敏沖繩国際大学総合文化学部教授、社会科学部門の野添文彬沖繩国際大学法学部准教授に、野村一成会長から本賞（賞状）と副賞が贈呈された。

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会（昭和31年～47年5月）の後を受けて、昭和47年9月20日に設立された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年（2011）4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂の管理運営をすることで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

公益財団法人 沖縄協会

第38回
(平成28年度)

沖縄研究奨励賞 受賞記念講演要旨



シークワーサー果皮と ギンギシを用いた 機能性素材の研究開発

琉球大学教育学部
准教授 照屋 俊明

シークワーサーは沖縄県の特産品の一つとして広く知られており、生産量は全国の99%を占め、年間約2千〜3千トンが生産されている。収穫されたシークワーサーの一部は酸味料や生食用となるが、その大部分は果汁飲料として加工されている。加工の際は果実を丸ごと搾汁する全果搾汁方式により加工されているが、搾汁効率には50%程度であり、加工副産物である搾汁残渣が大量に廃棄され、現在その処理が問題となっている。

一方、廃棄される搾汁残渣の果皮には、様々な薬理活性を示すことが報告されている。ノビレチンやタンゲレチンなどのポリメトキシフラボノイド類(PMF)が多く含まれることが明らかになっている。そこでシークワーサーの高付加価値化のための利用技術の開発を目的として、多彩な薬理活性を示すPMF



を廃棄残渣から簡便に回収する方法の開発に取り組んだ。その結果、アルカリ水溶液を用いたノビレチン及びタンゲレチンの効率的な抽出、精製法を株式会社沖縄リサーチセンターと共同で開発した。さらに得られたPMFを用いて研究を進めたところ、ノビレチンに抗肥満効果と脂質代謝改善効果、糖代謝やインスリン抵抗性改善効果があることを明らかにした。またノビレチンが、がん細胞の成長を促進するとされる肥満状況下でも、がん細胞の成長と転移を抑える効果があることを検証した。さらに、ノビレチンの美白効果や排尿障害改善作用など新しい機能を解明した。

またポリメトキシフラボノイドの効率的な回収法の開発以外にも、抗糖尿病効果が期待される琉球諸島に自生するギンギシの根に含まれるネボジンの効率的な回収法を開発した。

琉球文学の しまくとぅばの分析

沖縄国際大学総合文化学部
教授 西岡 敏

私は、大学・大学院時代に沖縄語(ウチナーグチ)をはじめとする琉球言語方言と出会い、その魅力にとりつかれて研究を続けてきた。特に、敬語の研究および歌謡・詞章における言語学的分析は、私の研究の中心的な位置を占める。

敬語の研究では、沖縄語首里方言のラジオ放送や語学的な講座、「おもしろさうし」や「組踊」などの琉球語古文獻的分析に触発され、その体系的・系統的な記述に努めてきた。その結果、首里方言においても、尊敬語・謙譲語・丁寧語の敬語体系が整っており、場合によっては日本語標準語よりも詳しい使い分けがあることが判明した。また、敬語の歴史の変遷、すなわち、「おもしろさうし」から「組踊」、さらには現代首里方言へと、敬語が変化していく過程についても考察を行っている。そして、沖縄語首里方言のみならず、宮古語野原方言や八重山

語竹富方言についても、敬語体系や歴史の変遷の解明を進めている。

歌謡・詞章の研究では、琉球語の「文語」と「口語」に注目し、その言語表現の特徴について考察を行っている。沖縄語の文学的表現において、助詞「ヤ」「日本語」「は」に相当)が付くときに音変化が生ずるか否か、助詞「ユ」(日本語「を」に相当)が使用されるか否かなどについて、歌謡・詞章における「定型律」と「自由律」の観点から明らかにしようとして試みている。琉球歌形式(8886)などの「定型律」では、音韻・形態・語彙という多層なレベルで音数律に適合化しようとする意図が働いている。そのため、「定型律」における表現では、口語(日常語)のみならず、歴史的には一段階古いと考えられる文語(歌謡語)も駆使され、表現の幅が広がられている。

琉球語諸方言における口語(日常語)の分析と並んで、口承文芸や筆録文芸として残されている歌謡・詞章の言語文化学的分析も重要である。これからも文芸記録等の分析を推し進め、琉球語文芸そのものの再生に向けても取り組んでいきたい。

施政権返還後の 沖縄米軍基地と日米安保体制

沖縄国際法学部
准教授 野添 文彬

この度、尊敬する先生方が受賞されてきた沖縄研究奨励賞を私も受賞することになり、大変光栄に思う。

私はこれまで、沖縄返還とそれ以降の沖縄米軍基地をめぐる日米関係について研究し、昨年七月、「沖縄返還後の日米安保―米軍基地をめぐる相克」を吉川弘文館から出版した。従来、沖縄米軍基地の歴史については、米軍占領から沖縄返還までの時期に関して膨大な研究がなされてきた。他方、九〇年代以降についても多くの文献が存在する。これに対し、沖縄返還実現から九〇年代までの時期については、実証的な分析はほとんどなく、研究史上の空白であった。しかし、沖縄返還直後の時期は、日本本土の米軍基地が大幅に削減された一方で、沖縄では米軍基地がほぼ維持された結果、在日米軍基地の約四分の三が沖縄に集中することになるという、「沖縄基地問題」の歴史における重要局面であった。

このような観点から、私は、一九七〇年代を中心に沖縄返還以降の沖縄米軍基地をめぐる米国、日本、沖縄の相互関係を検討した。その上で、沖縄返還直

後、米国政府は、海兵隊撤退など沖縄米軍基地の大幅縮小を検討したこと、しかし日本政府は、米国のアジア関与縮小への不安から、海兵隊の維持を米国側に要請し、米軍基地の維持のため対米協力を進めたこと、その結果、沖縄の米軍基地の多くが維持されたことなどを明らかにした。その上で、「沖縄基地問題」の政治力学における日本政府の役割の重要性を指摘した。

今年、二〇一七年は、沖縄返還が実現して四五年目の節目にあたるが、私の研究は、沖縄返還後の日米関係を検討することで、沖縄返還とは何だったのかについて新たな光をあてる作業であったといえる。世界が大きな変動期にある現在、戦後秩序とそとの日米安保や沖縄の歴史を再検証することはますます重要になっている。今回の受賞を励みに、今後も沖縄をテーマとして国際政治学及び外交史研究に邁進したい。



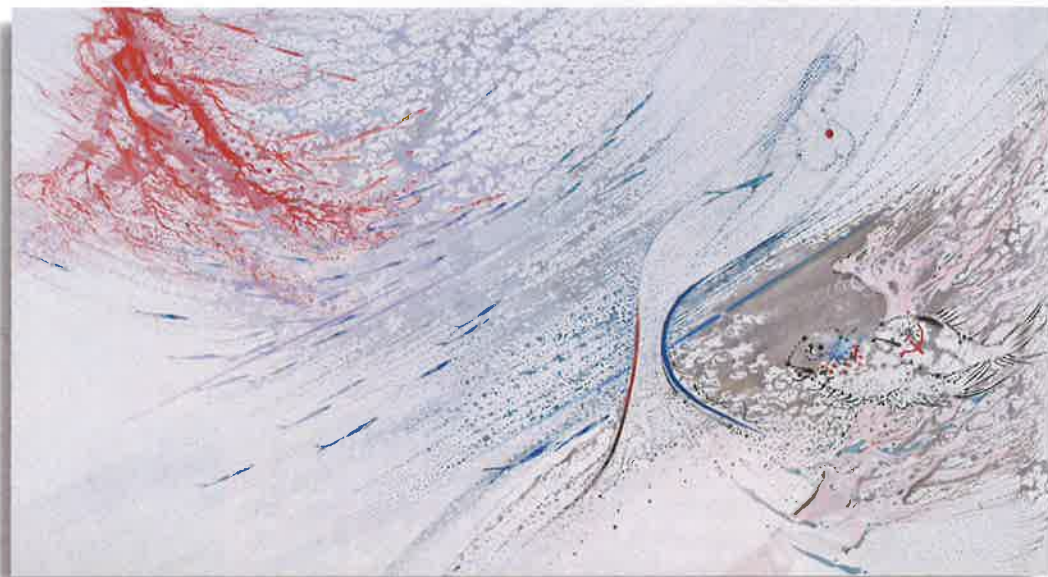
沖縄平和祈念堂 所蔵絵画紹介

平和の絵―戦争と平和―

20点連作―第2作

愛は海を越えて

西村計雄作 300号



〈制作意図〉 この作品は西村計雄画伯が沖縄平和祈念堂に捧げる連作18点(いずれも300号)のうちの1点であるが、世界列強のなかにある平和の聖地、オキナワを美女にたとえ「愛は海を越えて」と題する。西村計雄先生が文子夫人と沖縄を訪れたのは3年まえであるが、そこでみた沖縄は戦争に打ちひしがれた山野と、その山野のなかから沖縄のひとが立ちあがって平和を叫ぶ姿であった。叫ぶこととは声を大きくすることではなく、静かにほほえむ美女の姿である。微妙な筆の運びによって鮮血とブルーの交錯する平和讃仰の図が完成した。
(昭和55年2月15日寄贈)

〈額サイズ〉 縦×横×厚 / 174.5×304×6.6cm

西村計雄[明治42年生 北海道] 東京美術学校卒、藤島武二に師事。1943年文展(現・日展)特選。戦後早稲田中学校と高等学校の教師を勤め、51年に42歳で単身渡仏する。ピカソの画商カーンワイラー氏との出会いを契機に、53年よりパリを中心にヨーロッパ各地で個展を開催。その作品は、フランス国立近代美術館やパリ市美術館に買い上げとなった。フランス芸術文化勲章、パリ・クリティック賞、勲三等瑞宝章、他受賞多数。北海道岩内郡共和町名誉町民、共和町立西村計雄記念美術館開館。2000年12月4日没。

沖繩平和祈念堂における
平和学習

沖繩平和祈念堂には年間多くの小学校から高等学校の児童生徒が訪れ、沖繩戦記録映画の鑑賞、平和集会、戦争体験者講話、平和祈念セレモニーやコンサート等を行っている。(平成27年度は4万9千339人)
その一部を紹介する。

平成28年4月22日、岐阜県守山市立守山北中学校(154人)が訪れ、古謝厚雄氏を招いて戦争体験者講話を行った。その後、平和祈念セレモニーを行い、生徒全員による平和合唱、平和宣言が読み上げられた。

第39期
守山市立守山北中学校
平和宣言文

僕たち私たちは、平和学習を通して、命の尊さ、戦争の悲惨さを学びました。家族や友達を失う悲しみ、故郷を奪われることの残酷さに気づきました。そして今、この世の中は平和なのかを考えました。身近な命を守り、同じ過ちを二度と繰り返さないように次のことを大切にします。

一、平和のために、手と手を取り合って助け合うこと
二、戦争の悲惨さを次の世代に繋いでいくこと
三、何かを憎むより、すべてものを愛せる人になること
四、大切な人といられる毎日に感謝すること
五、自分の命もまわりの命も命も大切にすること

以上5つのことを大切に、幸せや笑顔、優しさが永遠に続く、愛が溢れる世の中を創ることを宣言します。

平成28年12月10日、和歌山県立星林高等学校(272人)が訪れ、平和集会を行い、生徒代表による平和宣言が朗読された。

和歌山県立星林高等学校
平和宣言

暖かい空気と透き通った海。この美しい自然の中に、戦争の爪痕が残る沖繩に私たちはやってきました。いま世界では、決して平和とは言えないような状況を目の当たりにすることがあります。テロや紛争が起こり、恐怖に震える人々や、幼くして、戦場に駆り出される子どもたちがいます。私たちは日本の未来を担う者として、このよう

な現状から目を背けるわけにはいきません。日本では戦争が終わり、平和になったと言われていますが、世界に目を向けるといつも戦争は身近にあるのです。サイパン島の陥落によって本土空襲が激化した太平洋戦争は、日本中で多くの死傷者を出しました。東京大空襲の後米軍は沖繩本島に上陸し、本土上陸を遅らせる時間稼ぎのために、沖繩の作戦が実行されました。沖繩戦では軍人よりも住民の命が多く失われ、沖繩の人々を生死に関わらず苦しめることになりました。このような戦争を体験した中には自分が生き残って申し訳ないと話す人や、戦争を思い出すと辛く話すことができ

ない人もいます。戦争を知る人々の傷は癒えていないのです。戦争で犠牲になった人たちにも、大切なものがあつたはずですが、それを戦争が奪ってしまったと考えると、胸が締め付けられる思いです。「生きる」と言われることよりも、国のために命を落とすことが美しいとされた戦時から七〇年がたち、私たちは今、戦争の恐ろしさを知らずに生きています。平和の中で生きていく私たちが、普段平和を感じる瞬間などないに等しいでしょう。だからこそ、こ

の限られた時間の中で沖繩の過去を見つめ、戦争の恐ろしさを知っていかなければなりません。私たちが平和・歴史に関心を持つことが、戦争を起こさないことの原点になるでしょう。戦後一〇〇年になると、先の大戦を知る人はいなくなり、この凄惨な歴史から目を背けることのないよう、私たちが体験者の想いをしっかりと受け継ぐことが必要です。いつか、「戦争の道」を歩む日がくるかもしれないし、こないかもしれせん。戦争を伝えることを途切れさせてはいけません。それが、戦争を知らない私たちに出来る唯一のことであると思うから。知ること、そして伝えることで、平和の道を築いていこう。

平成28年12月10日
和歌山県立星林高等学校
2年生一同

平成29年2月14日、三重県立伊勢工業高等学校(195人)が訪れ、講師に新里スエ氏を招いて戦争体験者講話を行った。新里氏は悲惨な沖繩戦から戦後の米軍統治にいたる苦難な体験を語り、生徒の皆さんも熱心に聞き入った。



沖繩平和祈念堂の彫刻

「少年」の像

制作：佐藤忠良

世界的な彫刻家である佐藤忠良氏が制作された「少年」の像が、沖繩平和祈念堂敷地内の摩文仁の丘を見渡せる場所に設置されている。堂宇後方にある瞑想の森のガジュマルの木の根元から少年の遺骨と、朽ち果てた小さな軍靴と錆びた手榴弾3発が発見された。沖繩戦で散った前途ある少年たちの死を悼み慰め、平和を願う礎とするため、沖繩の本土復帰10周年を機に全国の子供たちの協力を得て建設された。佐藤氏は制作のため数回現地を訪れて「苦悩を内に秘めた『少年』の像として、過去、現在、未来を凝集したものをめざし、訪れる人びとがこの像と対話できるような触れあいを大切にしたい」と語った。

佐藤忠良(さとう ちゅうりょう) 1912年7月4日生まれ、宮城県出身の彫刻家。東京美術学校彫刻科を卒業、新制作協会創立当初より会員として活躍。芸術選奨、国展賞3回、毎日芸術賞、第1回現代日本美術展賞、高村光太郎賞、中原賞などを受賞。1981年、フランス・パリの国立ロダン美術館において日本人初の個展を開催。フランス・アカデミー・デ・ボザールの客員会員に推挙されるなど、国際的にも高い評価を得た。2011年3月30日永眠。



応募案内
沖繩青少年勉強支援制度

この制度は、本土(沖繩県以外の都道府県)で働きなから学ぶ沖繩青少年を支援し奨励するため、昭和48年に設置された。この制度に賛同いただいた沖繩出身者を含め多くの方々からの温かい寄附金でつくられた「働きなから学ぶ沖繩青少年支援基金」の運用により勉強支援金を給付している。平成29年度の応募は、4月1日〜6月30日まで。当日消印有効。

※詳細は「公益財団法人沖繩協会」のホームページへ